成長志向で互いから学ぶ中身の詰まったユーザ会
常に真剣ゆえに生まれる一体感が未来を照らす

mcframeは製造業の業務を直接的に支えるプラットフォームであると共に、導入企業が経験に基づいて醸成させたノウハウや、先々を見つめる実務担当者の熱き想いまでをも流通させるプラットフォームだ。それが紛れもない事実であることの証左となるのがユーザ会の活動である。

「mcframeユーザ会」は、その名の通りmcframeのユーザ企業の集まりで、製造業の課題解決に向けた議論やソリューション有効活用に向けての情報交換、会員相互の親睦などを目的として活動している（図1）。発足したのは2005年。使い手としてのユーザ企業が主体となって運営し、作り手であるB-EN-Gは特別賛助会員としてサポート的な位置づけで関与する。

グローバルに広がる研鑽の場

IT業界には、ソリューションベンダーの声がけによるユーザ会が多々あるが、年に数度の感謝の宴が企画される程度で形骸化しているものも少なくない。ところがmcframeユーザ会は、各種研究会あり、工場見学会ありと、常に“真剣で全力投球”なのが大きな特徴だ。会員同士の風通しもよく、mcframeに関することのみならず製造業に関わること全般について、互いに相談を持ちかけたりすることも珍しくない。一致団結し、B-EN-Gに対して機能の強化や改善を働きかけることもしばしばだ。「mcframeは利用企業に鍛え上げられてきた」と表現されることが多々あるが、それは、このユーザ会が大きく貢献している。

近年では、タイやインドネシア、中国などにも輪を広げ、グローバルな活動としての色彩も強めている（図2）。

経験知のシェアリングエコノミー

会員は、まだ導入したての企業もあれば、20年以上にわたって使い続けている企業もある。特にベテラン企業を見るならば、mcframeのためなら一肌脱ぎたいというヘビーユーザが厚い層を作り始めた。導入から日が浅くこれからが本格的な定着フェーズという企業があるならば、親身になってアドバイス役を買って出てくれる。そうした使い手同士の一体感、さらには作り手とごくごく近い距離感が、新たにmcframeを導入することのハードルを下げ、「ユーザ会があるからこそ安心して導入に踏み切れる」という決定打の一つにつながっているのだ。

2020年はコロナ禍の影響で、オンライン形式での代替や、順延の検討が余儀なくされた。会員交流サイトをグループウェア（POWER EGG）でリニューアルし、研究会のWEB開催など、オンラインによる意見交換が進んだが、いまだ終息のメドが立たず、メンバー誰しもがもどかしさを感じている。しかしながら、逆境に立たされている時こそ仲間のことに思いを馳せ、屈託なく会える日を心待ちにしている。その暁には、一連のコロナ禍で得た教訓や知見がまた一斉に共有されるはずだ。衆知を募って明るい未来へとつなぐ。それがmcframeユーザ会の真骨頂なのだ。

mcframeユーザ会
(MCUG: mcframe Users Group)

目　的	製造業の課題解決に向けた議論、mcframeの有効活用に関する情報交換や研究、会員相互の親睦など
会員数	国内：175（正会員151社、賛助会員22社、名誉会員2人） 海外：38（正会員32社、賛助会員6社）
年会費	国内：正会員（ユーザ企業）　20,000円 賛助会員（パートナー企業）100,000円 海外：正会員（ユーザ企業）　5,000円 賛助会員（パートナー企業）　25,000円
事務局	E-mail：mcf-users@b-en-g.co.jp tell：03-3510-1604　fax：03-3510-7358 https://www.mcfusersgroup.com/

図1　mcframeユーザ会の概要（2020年11月末時点）

年間を通じて様々なプログラムを企画・実施

研究会：テーマ密着型の活動	随時企画するイベントや講習
組立加工系研究会	工場見学会（合宿）
プロセス系研究会	ワークショップ
Pharma研究会	各種セミナー
マネージャーズ研究会	各社課題相談会
分科会：地域密着型の活動	**海外での展開**
中国・九州分科会	タイ・mcframeユーザ会
関西分科会	インドネシア・mcframeユーザ会
北陸・長野分科会	中国・mcframeユーザ会

図2　mcframeユーザ会の主要な活動内容

使い手と作り手をつなぐ

オンライン LIVE配信に挑んだ 2020年度の ユーザ総会

2020年9月18日（金）、mcframeユーザ総会が開催された。例年であればJR東京駅にあるホテルのカンファレンス会場に参加者が集い、午後からの半日イベントは独特の熱気に包まれるのが通例。しかし今年はコロナ禍が収束する気配を見せず、感染拡大防止の観点からオンラインでのLIVE配信へと開催方式を大きく変更した。

研究会活動や工場見学会などを通じて親交のある会員企業が多いことから、リアルの場で一堂に会すことのできるユーザ総会を楽しみにしているメンバーは多い。再会を喜びながらmcframe使いこなしの近況を報告し合ったり、懇親会ではさらにフランクに歓談したりと、まるで同窓会のような雰囲気で盛り上がるのは毎度のこと。だからこそ、オンライン開催に踏み切るのは苦渋の決断でもあったことだろう。

できる限り自分たちの手で

ユーザ会活動の主導権はあくまでユーザサイドが握り、B-EN-Gは後方支援に徹するのが役回りだ。今年も基本方針は変わらないものの、オンライン開催というイレギュラーなスタイルだったためLIVE配信の最前線ではB-EN-Gのスタッフが中心となって切り盛りする姿がそこかしこにあった。

リアルイベントがオンラインに切り替わることの多い昨今、当日の運営を映像系の専門業者にアウトソーシングするケースも多い。しかし、B-EN-Gには「何事においても常に現場を肌感覚で知っておきたい」という想いが通底しているのか、自分たちで用意した機材を使って、できるだけ自分たちで配信実務を担おうとの姿勢が貫かれていた。

ネット上に生まれた一体感

本番が始まると、配信会場にはピンと張り詰めた緊張感が漂い、一方ではLIVE配信の視聴者数が続々と増えて、例えフェイスツーフェイスで会えなくても自分たちはネット上の場を共有し一つになれるんだという熱気を帯びていた。研究会や海外ユーザ会の活動報告、決算や予算の承認、本運用や長期運用に至った会員の表彰、B-EN-Gからの戦略やロードマップの説明など一連のプログラムは滞りなく終了。最後の閉会アナウンスが流れた後の会場には、「お疲れさまでした！」の声が随所から上がり、安堵と感動がしばし渦巻いていた。

写真１　B-EN-G本社と同じオフィスビルの中にあるカンファレンス施設が配信会場に。照明や映像機器が所狭しと並び、スタッフは進行台本とにらめっこしながら緊張感を持ってそれぞれの任務を全うした。

写真２　ユーザ会の役員陣も配信会場に。消毒、フェースガード、アクリル板など万全の感染対策がなされた中で自らの出番を待つ。このような回を経験するからこそ終息後のリアルイベントが待ち遠しい。

写真３　ユーザ会会長より方針説明。グリーンバックの前でビデオカメラに視線を合わせて話しかける慣れない動作に調子が狂いがちだが、その向こうで多くの会員が視聴してくれているとなると背筋も思わず伸びる。